

---

マーク狩獵記 PORTABLE ~ver.ティナ~

STORM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マーク狩猟記 PORTABLE ｝ver・ティナ｝

### 【Nコード】

N2761D

### 【作者名】

STORM

### 【あらすじ】

短編第2弾。本編では語られなかったティナの過去。貴族だった彼女がハンターになることを決意した時のことを短編でお送りします。

(前書き)

短編はギャグがないです。  
そこはご了承ください。

その日は窓から差し込む光が部屋の中に入り彼女にとっていい朝を迎えた日でした。

これは、ある日彼女は他国から兄と共に馬車で国に帰る間に起きた出来事。

「兄上様！馬車が出ますよ！早くして下さい！」

彼女はとても楽しそうな顔をしていました。

「待てよ、ティナ。まだ時間はあるよ」

兄のギルバートはティナに手を引かれて馬車に乗り込みました。

「だって今日は私の誕生日だよ？」

「はは、分かったよ。じゃあ、行こうか」

二人の楽しそうな声が響きわたり、馬車は進み始めました。

「ティナ、起きて。ここの街で休憩しよう」  
いつの間にか寝ていたティナは兄に起こされました。  
しかし彼女は眠かったようで馬車で待っていることにしました。

二時間後

目を覚ましたティナは未だに兄が帰ってきていない事に気づきまし

た。

「兄上様・・・？」

彼女は静かに馬車から降り、街を目指そうとしました。

そして、彼女は絶句しました。

「えっ？」

あたり一面、

烈火の海が広がっていました。

「ここ、火山？」

話には聞いていた彼女でしたが、実際に見るとそれなりに恐ろしいもので、溶岩から少しずつ離れていきました。

「はぁ、はぁ・・・暑いよぉ」

灼熱の洞窟は呼吸をすることも辛いほどでした。

呼吸をする度に肺が焼けるような感覚が襲い、次第に立っていることでさえ途轍もなく辛くなってきました。

馬車に戻ると体温を下げる事と水分を摂取する事のためにクーラードリンクを探しました。

「・・・ない・・・」

馬車にはクーラードリンクどころかホットドリンクひとつも積まれていませんでした。

三十分後

テイナの息は荒くなり、汗が滝のように流れていました。意識もハッキリしていません。

「もう、限界・・・助けて・・・」

「テイナッ!」

薄れていく意識の中で兄の声が聞こえたような気がしましたが、すでに反応するだけの気力がありませんでした。

テイナはベッドの上で目を覚ましました。

「あれ?」

「気がついたか?」

「兄上様・・・ここは?」

周りを見渡すとそれなりに豪華な部屋でした。

「街だ。君は誘拐されたんだよ」

先ほどと違い、意識がしっかりしているので兄の言うことを理解することができました。

火山にいったことは夢ではなかった。  
彼女はそう思いながら窓の外を眺めました。  
外は明るく、まさに昼という空がそこにはありました。

あの後すぐに準備をして馬車に乗り込みました。

「ティナ、もう少し休んでも良かったんだよ？」

「大丈夫です。父上たちも待っているでしょう？」

暫く走つて、砂漠にたどり着きました。

「セクメーア砂漠・・・確か、この時期はディアブ羅斯は来なかったはず・・・」

兄が空を見上げてそう呟きました。

ティナは馬車の外を覗くと遠くの方で双角を持った砂色の悪魔が砂漠の中心を歩いていました。

「馬車を急がせないと・・・！」

兄は馬車を速く進めるよう使用人に指示を出しました。

「・・・ちっ、見つかった！」

兄は呟くと馬車から飛び降りて走り出しました。

「逃げろっ、ティナッ！」

角竜を引きつけている兄は大声で叫びました。

「ハンターが・・・いない!？」

ティナは使用人にハンターを出すように命じたが、雇ってくるのを忘れたらしくいませんでした。

暫くしてどこからかハンターが現れました。

「今日の獲物は・・・彼奴だな」

そのハンターはギルバートの側により「任せとけ、どこかの貴族様」と呟き、ハンマーを構えて砂色の双角に投げつけました。

角は鈍い音を立てて折れ・・・いや、どちらかというと砕けました。

「ははははははっ!弱いぜっ!」

ハンターは高笑いしながら砂色の悪魔を殴りました。

角竜は殴られる度に転倒し、甲殻も易々と砕かれていきます。

角竜の亡骸は原型を止めていませんでした。

「君は何者だい?」

兄が聞くとハンターは「気にするな、通りすがりのハンターさ」と笑いながら言いました。

「まあ、貴族さんも馬車に戻ったらどうだ?待ってるぜ?」

指さした方向には今まで乗ってきた馬車がありました。

「とりあえず助かった、ミナガルデに来てくれれば礼をしよう」



兄はハンターと別れ、砂漠を横断していきました。

「……つめが甘かった……このままじゃ貴族さんが死んじゃまう  
！」

ハンターが気づいたときは手遅れでした。

馬車の中で手を振って兄を待つティナ。

全力で走っている兄。

砂漠の端に佇んでいるハンター。

ハンターが走って向かいましたが、その先には

死しかありませんでした。

「兄上様っ！」

「貴族っ！」

ティナとハンターが叫んだ瞬間、地面から黒き双角が突き出てギルバートの胸を貫きました。

「兄上っ！」

ティナが手を伸ばしましたが届くはずもありませんでした。

「兄上様！」

ティナが駆け寄ると黒いディアブロスが待ちかまえていました。ディアブロスは血が付いた角を天に掲げています。

「どけえ、小娘っ！」

ハンターがようやく追いつき、ハンマーを二つ構えました。

「貴族さんのかたきだー！」

ハンターはディアブロスを狩り終わるとひざまずきました。

「お嬢ちゃん・・・悪かった・・・君の兄を救えなくて・・・」  
ティナはハンターを見て優しく微笑みました。

「あなたは悪くないですよ」

その声は優しさが隠っていました。

それと同時に、ふるえた声でもありました。

兄の顔に触れているその手には無数の雫がついています。

「兄上様・・・目を覚まして・・・」

ティナの目からこぼれ落ちた雫が兄の顔に当たり、兄が目を開きました。

「ティナ・・・そうだ、言い忘れてたことがあったね」

兄はそう言うてから、

「誕生日おめでとう」

微笑みながら、兄は動かなくなりました。

「嘘・・・嘘・・・いやあああああ!!」

ティナは泣き叫び、兄の腕を握りしめていました。その光景に、ハンターも涙を流していました。

「夜の砂漠は冷える。早く帰った方が良い」  
ハンターはティナに忠告しました。

「ごめんなさい・・・取り乱して・・・早く帰らないと・・・」  
ティナは泣きながらも正確に返答しました。

「ありがとうございます・・・もしよければ、家に来てください・・・」

ティナはそう言って馬車に乗り込みました。

そのとき彼女は決意を固めました。

「私は兄上様を助けられなかったぶん他の人を助ける。  
そのために、」

「ハンターになるんだ」

馬車はミナガルデには向かわず、ドンドルマを目指して進み始めました。

数カ月後

「これがポイズンタバール？」

彼女はギルドの好意で手にした片手斧を左手に持っていました。

(後書き)

途中で出てきたハンター。

あの人Gでです。

ティナの髪とか瞳の色とか考えてないので、感想にどんな想像をしているのか書いて下さればありがたいです。ある程度集まったら決めたいと思います。

ちなみにティナは14歳です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2761d/>

---

マーク狩獵記 PORTABLE ~ ver.ティナ ~

2010年10月9日20時11分発行